

合唱協会の演奏活動における市民的表現行動

—19世紀ドレーズデンを例に—

井上 登喜子*

1. はじめに

本稿は、19世紀ドイツの一地方都市ドレーズデンの合唱協会を取り上げ²⁾、その演奏活動に表象される市民³⁾の表現行動について考察するものである。

合唱という音楽行為が、社会の中で自己表現の機能をもつことは、これまでいくつかの先行研究で指摘されてきたが (Mahling1966, Dahlhaus1980)、この点について実証的研究はされていない。また、男声合唱協会の合唱祭や祝祭の政治的機能に関する研究はあるものの (Unverhau2000)、より日常的なレベルにおいて合唱協会の活動がもつ機能や意味についてはほとんど研究されていない。

従って、本稿は、ドレーズデンの合唱協会に関する一次資料から⁴⁾、合唱協会が経験した演奏機会を整理・分類することにより、それらの演奏活動が市民社会においていかなる機能をもち、また、どのような市民的表現行動となっていたかを明らかにすることを目的としている。

考察対象としては、1807年に設立された混声合唱協会「ドライシヒ・ジングアカデミー Dreyssig'sche Singakademie」(以下、本文や表ではDSと略すこともある)、1839年に設立された男声合唱協会「ドレーズデン・リーダーターフェル Dresdner Liedertafel」(DL)、1848年に設立された混声合唱協会「ローベルト・シューマン・ジングアカデミー Robert Schumannsche Singakademie」(RSS)を取り上げる。これら三つの合唱協会は、19世紀のドレーズデンの市民的音楽生活において指導的役割の一端を担っていたと考えられ⁵⁾、かつ考察に足るだけの十分な一次資料が現存するという点で共通している⁶⁾。

以下、第2節では、演奏機会の分類を行なった上で、それぞれの演奏機会の内容説明および三つの合唱協会との関わりを説明し、第3節では、演奏機会に表れる市民的表現行動について考察を行なう。

2. 演奏機会の分類と内容

2-1. 演奏機会の分類

本節は、一次資料に記された演奏活動の記録から、演奏機会の分類を行なう。本稿で用いる「演奏機会」という語は、演奏活動の種類を具体的に示すものであり、演奏目的、演奏場所、主催者や共演者、演奏の対象者など演奏活動を成立させる複数の要素によって決定づけられるもの、とここでは定義しておこう。

演奏機会のデータは、「ドライシヒ・ジングアカデミー」については『100周年記念論集』(DS1907)から、「シューマン・ジングアカデミー」と「リーダーターフェル」については各々の『50周年記念論集』(RSS1898, DL1889)から抽出されるものを用いている⁷⁾。データ数はDS470回(考察対象期間:1807-1907年)、RSS151回(1848-1898年)、DL277回(1839-1889年)の合計898回である⁸⁾。

これらの演奏機会のデータは、表1に示したように、主たる演奏目的別に10種類に分類することができ、さらに、音楽演奏を主たる目的とする演奏機会(A, B, C)と、音楽以外の目的を併せもつ演奏機会(D~J)に分けて捉えることができる。音楽演奏を主たる目的とする演奏機会は、主催者が合唱協会か宮廷楽団かによって区別され(A:合唱コンサート、B:宮廷楽団のコンサート)、また、演奏場所がホテルやレストランなど市内の建造物に備わった演奏会用広間か(A)、宮廷歌劇場か(B)、あるいは教会か(C:教会コンサート)によって区別される。一方、音楽以外の目的を併せもつ演奏機会は、その目的別に、故人の追悼コンサート(D)、慈善活動のため

キーワード：合唱協会、合唱活動、コンサート、ドイツ市民層、市民的社交

*平成8年度生 比較文化学専攻

井上 合唱協会の演奏活動における市民的表現行動

のコンサート (E)、創立記念祭 (F)、公の催しへの参加 (G)、ドレーズデン市と周辺地域の合唱祭、および全ドイツの規模の合唱祭への参加 (H)、社交的楽しみ (I)、君主や仲間に歌の演奏を捧げるセレナード (J) に分類される。

表1の右欄には、三協会が考察対象期間内にこれら10種類の演奏機会を行なった割合と回数を示している。混声合唱協会では音楽演奏を主たる目的とするコンサート (DS:A, B, C, RSS:A, C) が高い割合を占めるのに対し、男声合唱協会では合唱コンサート (A 23.1%) とならんで、音楽以外の目的を併せもつ複数の演奏機会 (E 19.9%, F 11.9%, G 11.9%, I 19.1%, J 7.2%) にも重さが置かれている。こうした演奏機会の重点の置き方は、混声合唱協会と男声合唱協会の活動傾向の違いを反映している。合唱協会が発行している規約 (DS1832, DL1841, RSS1886 [1864]) を見ると、混声合唱協会が音楽演奏を通して芸術音楽を振興することを活動方針に記しているのに対し、男声合唱協会は合唱練習と社交的楽しみを結びつけて捉えているという相違が見られる⁹⁾。なお、この活動傾向の相違は、演奏活動の記録の仕方とも関連している。男声合唱協会がコンサートと音楽外の目的をもつ演奏機会を同等に記したのに対し、混声合唱協会の一次資料に記された創立記念祭、公の行事、社交的楽しみ、セレナードの記録には一貫性がなく、データ数は時代によって偏りが見られ、全体数も少ない¹⁰⁾。

表1 演奏機会の分類とその割合

演奏機会	DS(1807-1907) (470回)	RSS(1848-1898) (151回)	DL(1839-1889) (277回)
A 合唱コンサート	57.4% (270回)	29.1% (44回)	23.1% (64回)
B 宮廷楽団のコンサート	14.9% (70回)	4.6% (7回)	0.7% (2回)
C 教会コンサート	10.4% (49回)	33.1% (50回)	0.4% (1回)
D 追悼コンサート	7.9% (37回)	2.0% (3回)	1.1% (3回)
E 慈善コンサート	3.4% (16回)	5.3% (8回)	19.9% (55回)
F 創立記念祭	3.0% (14回)	17.9% (27回)	11.9% (33回)
G 公の催し	1.9% (9回)	4.0% (6回)	11.9% (33回)
H 合唱祭			4.7% (13回)
I 社交的楽しみ	0.2% (1回)	3.3% (5回)	19.1% (53回)
J セレナード	0.9% (4回)	0.7% (1回)	7.2% (20回)

さらに、演奏目的のほかにも、共演者 (団体)、演奏時期 (定期的か否か)、演奏の対象者、演奏活動の具体的内容など、演奏機会を構成する複数の要素を詳しく考慮すると、これら10種類の演奏機会は21種類に下位分類することができる (表2左欄参照)。表2の右欄は、これらの演奏機会についての、三協会の一次資料の記録状況を示している。なお、記録数が5回以下の項目には※印を付している。以下、この表2に基づいて、個々の演奏機会が、19世紀ドレーズデンの市民的音楽生活、ならびに市民社会の中でいかなる役割を果たしていたかという点に注目しながら、演奏機会の内容および合唱協会との関わりについて説明していく。

表2 ドレーズデンの合唱協会による演奏機会の下位分類

演奏機会		DS	RSS	DL
A 合唱コンサート		○	○	○
B 宮廷楽団のコンサート 「枝の主日のコンサート」		○ 1833年～	○ 1877年～	※ 1875/76年
C 教会コンサート	C-1 贖罪の日のコンサート	○ 1876年～ 19世紀末	○ 1877年～	
	C-2 宗教コンサート	○	○	※
D 追悼コンサート	D-1 会員の追悼	○		
	D-2 指導的音楽家の追悼	○	※	※
	D-3 ザクセン国王一族の追悼	○	※	
E 慈善コンサート	E-1 慈善目的の募金	○	○	○
	E-2 芸術家や偉人の記念碑	○	※	○
	E-3 愛国的目的（戦時下）	※	※	○ 1860・70年代
F 創立記念祭	F-1 コンサート形式	○	○	○ 1840年代
	F-2 特別な創立記念祭	○	○	○
	F-3 音楽劇の上演			○ 1850年代～
G 公の催し	G-1 除幕式			○
	G-2 愛国的祝祭			○ 1870年代
	G-3 ザクセン王家の慶事	○	○	○
H 合唱祭				○ 1840年代～
I 社交的楽しみ	I-1 小旅行	※	※	○
	I-2 パーティー			○
J セレナード	J-1 会員など		※	○
	J-2 ザクセン王家	※		○

注1 斜線は一次資料に記録がないことを、※印は記録数が5回以下であることを示す。

注2 演奏機会の行なわれた時期が限定されている場合には、年代を補足的に記している。

2-2. 演奏機会の内容

合唱コンサート (A) は、三つの合唱協会の中心的な演奏活動であった。「ドライシヒ・ジングアカデミー」は、1812年に合唱コンサートの定期演奏を開始しており、これは宮廷楽団の「枝の主日のコンサート」(1826年開始)より14年も先行する先駆的な試みであった。「リーダーターフェル」も「シューマン・ジングアカデミー」も設立直後から合唱コンサートを行なっており、これら三つの合唱協会が主催するコンサートは、1850年代末まで予約定期演奏会が確立しなかったドレーズデンにおいて、市民に音楽演奏を提供するという重要な役割を担っていた¹¹⁾。

宮廷楽団が主催する「枝の主日のコンサート」(B)には、「ドライシヒ・ジングアカデミー」が1833年¹²⁾から定期的に参加したのに対し、「リーダーターフェル」と「シューマン・ジングアカデミー」では1870年代後半によく招聘された記録が見られる。このことは「ドライシヒ・ジングアカデミー」が、ドレーズデンで最初期に設立された合唱協会であり、他の二協会よりも会員の社会階層がやや高く、貴族身分や君主、宮廷楽団と密接なつながりをもっていたことに起因すると考えられる¹³⁾。

教会コンサート (C)には、オラトリオの定期演奏会「贖罪の日のコンサート」(C-1)と、合唱協会がドレーズデン市内および近郊の教会で単発的に行なった宗教コンサート (C-2)がある。「贖罪の日のコンサート」は、1876年に新市街の三王教会において、「ドライシヒ・ジングアカデミー」と「シューマン・ジングアカデミー」、そして「ノイシュタット合唱協会Neustädter Chorgesangverein」(1865年設立)という三つの混声合唱協会によって開催された。キリスト教の教会暦との関連から、最後の主日前の水曜日である「贖罪の日Bußtag」に合わせて毎年11月20日前後に開催され、主として18世紀後半から19世紀のドイツ人作曲家によるオラトリオが演奏されたが、この演奏機会は、典礼とのつながりは薄く、むしろ市民的コンサートという脈略で行なわれた。

追悼コンサート (D)、すなわち故人の「追悼祭(式)」は、市内の教会や演奏会用広間をもつ建物で行なわれた。その対象者は合唱協会の会員 (D-1)、宮廷楽長などのドレーズデンの指導的音楽家 (D-2)、そしてザクセン国王一族 (D-3)であり、「ドライシヒ・ジングアカデミー」では三者すべてに対する追悼コンサートが19世紀を通して行なわれたが、「リーダーターフェル」と「シューマン・ジングアカデミー」については指導的音楽家や国王一族の追悼コンサートの記録がわずかに残っている。

慈善コンサート (E)は、入場料や募金による収益の使用目的により、三種類に分けられる。第一に、貧困層や孤児の救済、病院や施設の建設資金の援助、被災地の住民への支援などを目的とする、慈善目的のコンサートがある(E-1)。「リーダーターフェル」では、「エールツ山脈の貧困者のため (1847年)」、「聾啞の少女の保護施設のため (1863年)」、「シカゴの大火事で困窮するドイツ人のため (1872年)」、「ライン川流域の洪水のため (1883年)」など、19世紀を通して慈善目的のコンサートが行なわれた。「ドライシヒ・ジングアカデミー」と「シューマン・ジングアカデミー」に関しても、数は少ないが慈善コンサートの記録が残っている。こうした活動は、貧困や災害などの社会問題に対する市民層の関心の高さを示していると言える。また、慈善活動の範囲はドレーズデン市内からザクセン王国領内 (エールツ山脈など)、ドイツの他都市、さらに他国に住むドイツ系住民へと広がっているが、ここから、「ザクセン人」、「ドイツ人」といった同胞意識が、慈善活動を通して、自分たちの生活領域から領邦や国を超えて外に向けられていく様子を読み取ることもできる。

第二に、芸術家や偉人の記念碑建設のためのコンサートがある (E-2)。記念碑建設の対象となったのは、主にザクセン国王やドレーズデンと縁のあるドイツ人芸術家であった。「記念碑を建てる」という行為は、自国の歴史や芸術に貢献した人物を称え、崇めることであり、それは愛国的民族主義のひとつの表現と捉えることも出来る。

第三に、「リーダーターフェル」によって行なわれた愛国的目的をもつ慈善コンサート (E-3)が挙げられる。愛国的慈善コンサートは、とりわけ普仏戦争下の1870年7月から翌年2月にかけて集中的に、市街地からエルベ川上流に3キロほど離れたヴァルトシュロスWaldschlossという野外会場で5千人を超える聴衆を動員して行なわれ、当時ドイツじゅうで熱狂的に支持された愛国歌¹⁴⁾が歌われた。また、その収益は、戦地に行った兵士の家族支援のために使われた。

創立記念祭 (F)は合唱協会の創立日を祝う催しであるが、そのパターンは次の三種類が挙げられる。第一に、通常の合唱コンサートと同じ形式で行なわれるもの (F-1)であり、混声合唱協会の「創立記念祭」はこれに該当するものが多い。第二に、25周年や50周年といった区切りの年に催される特別な創立記念祭 (F-2)が挙げられる。これは2、3日かけて演奏会や祝宴、舞踏会などが催される祝賀的雰囲気濃いものである。第三に、「リーダー

ターフェル」が行なった音楽劇の上演 (F-3) が挙げられる。劇のテキストと音楽は会員や合唱指揮者によって創作されたが、その内容は宴席にふさわしい喜劇や笑劇、パロディといったコミカルなものが多かった¹⁵⁾。祝宴の場で娯楽的要素の強い音楽劇を上演することは、会員にとって、社交的楽しみを共有し、仲間意識を強める機会になっていたと考えられる。

公の催し (G) はその具体的内容により三種類に分類される。第一に、記念碑の除幕式 (G-1) が挙げられる。記念碑の建設資金が男声・混声双方の合唱協会の慈善コンサート (E-2) によって集められたのとは対照的に、完成した記念碑の除幕式という公の催しに参列し、そこで演奏したのは男声合唱協会のみであった。「リーダーターフェル」は、「国王フリードリヒ・アウグスト1世の記念碑の除幕式 (1843年)」や「ヴェーバーの記念碑除幕式 (1860年)」などに参加し、国王や芸術家の記念碑を披露するという晴れがましい場に居合わせ、音楽演奏によってセレモニーの進行を司った。こうした公の催しでの音楽活動は、「リーダーターフェル」の会員にとって、地域のエリートとしての地位を世間に誇示する絶好の機会になったと考えられる。

第二に、1870年代前半、すなわち普仏戦争の勝利とドイツ帝国の統一という政治的な大転換が起こった時期に開かれた愛国的祝祭 (G-2) が挙げられる。これも戦時下の慈善コンサートと同様に、男声合唱協会に特有のものであり、ヴァルトシュロスの野外会場やアルトマルクト広場などで催され、愛国的な男声合唱曲が歌われた。第三に、国王の誕生日、皇太子や皇女の結婚式、国王夫妻の銀婚式・金婚式など慶事の祝い (G-3) が挙げられる。この催しには、男声合唱協会と混声合唱協会の双方が参加した。

合唱祭 (H) は男声合唱協会に特有のものである。19世紀の男声合唱協会は、一般に、市内のいくつかの協会の結びつきから地域内の連合組織が発展し、さらに、この地域的組織を通じて国レベルの連合組織へと結集していった。ドレーズデンにおける男声合唱協会の結びつきは、「リーダーターフェル」と同時期に設立された「オルフォイス Orpheus」(1834年設立) の二協会間の友好関係から始まった。1842年と43年には、これら二協会を中心として「全ドレーズデン男声合唱祭」が開かれ、これによりドレーズデン市内と周辺地域の合唱協会を結びつける地域的連携が形成された。さらに、1860年代になると、地域レベルの連合組織は国家レベルの連合組織に加入することで活動を拡大していった。1865年7月22日から25日にかけて、全ドイツ的連合組織による最初の合唱祭「第1回全ドイツ合唱団連合祭」がドレーズデンで開かれ、この合唱祭には2万人の合唱団員がドイツ国内外から集った¹⁶⁾。

「リーダーターフェル」の『記念論集』(DL1889)にはさまざまな社交的楽しみ (I) の機会についても記されている。それは、ドレーズデン近郊への小旅行 (I-1) や夕食会およびパーティー (I-2) などであり、こうした機会にも音楽はつきものであった。例えば、夏の小旅行では、エルベ川をマイセンやバスタイへと運行する蒸気船の上で、数々の男声合唱小品が歌われた。また、混声合唱協会についても、資料の記録の断片をつなぎ合わせると、「リーダーターフェル」と同様に社交的催しを行っていたと類推される¹⁷⁾。

合唱協会の資料には、セレナード (J) を行ったという記録も見られる。「セレナード」という語はさまざまな意味をもつが¹⁸⁾、本論では、敬意や祝いを表わすべき人に贈られる小曲、および、その家の前で演奏する行為を指している。その対象者は、合唱指揮者や役員など、協会と関わりのある個人 (J-1) やザクセン国王とその家族 (J-2) であった。「ドライシヒ・ジングアカデミー」や「シューマン・ジングアカデミー」の資料には、セレナードの記録はわずかしかなかった。

以上のように、合唱協会が「どの演奏機会を、どのくらい行なったか」には設立年代による社会階層的差異や混声・男声の活動傾向の違いが反映されているものの、全体的に見れば、合唱協会の演奏活動は、参加する市民層の社会的地位や文化的態度の表現として理解することができる。

3. 演奏機会と市民的表现行動

前節の考察により、19世紀ドレーズデンの合唱協会がさまざまな演奏機会を経験していたこと、個々の演奏機会が、合唱協会を取り巻く人々や市民社会との関わりにおいて展開されたことが明らかになった。本節では、こうした演奏機会に表れる市民の表現行動について考察する。

近代ドイツの市民層研究では、社交協会の実証的研究 (Sobania 1996) や市民的社交の研究 (Kaschuba 1988=1995) が19世紀の市民層の行動様式の一側面について明らかにしている。

ゾバーニアは19世紀の社交協会に注目し、その財政、会員構成、入会条件、社交的側面、協会間のつながりについて包括的な考察を行なった。そして、社交協会への所属が市民社会における地位の基準になっていたこと(Sobania1996:176)、また、社交協会は他の協会との密接なつながりを通して都市市民の広範なつながりを生み出しており、それが次第に地方のネットワークへ、さらに地域を超えて市民をつなぐものへと発展していったことを指摘している(Sobania1996:170,180)¹⁹⁾。

また、カシューバは、19世紀の都市に「新しい社交」—誕生日や子供の祝い、舗装された遊歩道での散歩と都市近郊へのハイキング、家庭音楽の夕べと舞踏会、コーヒーハウス通いや博物館におけるパーティーの夕べ、体操の練習、友達との水浴び、家族の集いや合唱協会での音楽の夕べ、小さなパーティーや祝宴などが広まったことについて言及している(Kaschuba 1988=1995: 104)²⁰⁾。そして、人々がこうした「社交」に参加するためには、都会に住んでいること、教養を備え、文化的生活を送っていること、余暇活動や社交のために費やす時間とそのための出費を賄うだけの生活的余裕があることなど、一定の社会的、経済的、文化的条件を満たす必要があったと指摘している。こうした必要条件は、市民であることや市民的な生活様式を示すものでもあった。さらに、カシューバによれば、「自由時間、つまり教養や娯楽目的のための時間的余裕は、示威的に見せつけられる」ものであり、「社交」は「市民であること」を外に向けて誇示する手段にもなっていたのである(Kaschuba1988=1995:109)。

本節では、これらの先行研究で言及された「市民のつながり」と「市民的社交」という市民層の特性が、合唱協会という音楽活動において、どのように具体的に表現されているかを考察する。

第一に、合唱協会の活動を、都市市民の結びつき(つながり)を生み出すものとして捉え、合唱協会内の団結、市内および地域他協会とのつながり、さらには地域を越えた結びつきへと発展したことに注目する。ここでは、愛国的、民族主義的な団結を示す表現行為も含めて考える。

第二に、合唱協会の演奏活動が提供するさまざまな「市民的社交」が、会員にとって、「市民であること」を自己認識し、かつ他者に誇示する「手だて」になっていたことに注目し、個々の演奏機会について、市民的地位や市民的行動様式を表わすもの、つまり、市民の社会階層的特徴の表現として解釈することを試みる。

以下、「市民の結びつき」と「市民層の社会階層的特徴の表現」という二つの観点から、演奏機会に表れる市民の表現行動について分析を行なう。表3は、これらの二項目に当てはまる表現行動を分類し(左欄)、それぞれの表現行動に該当する演奏機会を示したものである。なお、文章中および表3における演奏機会の表記は前出の表2に従っている。

表3 合唱協会の演奏機会に表れる表現行動

(1) 市民の結びつき

表現行動	該当する演奏機会
会員の結びつき (集団内強化)	D-1 (DS), F-1, F-2, F-3 (DL), I-1, I-2 (DL), J-1 (DL, RSS)
地域内の結びつき	C-1 (DS, RSS), E-3 (DL, RSS), F-2, H (DL)
地域を超える結びつき	H (DL)
愛国的民族主義の高まり	E-2, E-3, G-1 (DL), G-2 (DL), H (DL)

(2) 市民層の社会階層的特徴の表現

表現行動	該当する演奏機会
市民的社交	F-2, I-1, I-2 (DL), J-1 (DL, RSS), J-2
代表性の誇示	B, G-1 (DL), G-3
君主との距離	A (DS), D-3 (DS), E-2, F (DS), G-3, J-2
社会問題への関心	E-1
文化的指導層の表現	A, B (DS), C-1 (DS, RSS), D (DS)

3-1. 市民の結びつき

合唱協会に所属する人々は、演奏活動を通して、ドレーズデンの市民社会の中でさまざまなレベルで市民の結びつきを経験することができた。それは集団内の結びつきから、市内の他の合唱協会との結びつき、ドレーズデンを中心とする周辺地域の連合組織、さらに地域を越えた全ドイツ的連合組織まで、さまざまなレベルにわたっている。

第一に、会員同士の結びつきや集団内強化の役割をもつ演奏機会として、会員の追悼コンサート (D-1 (DS))、創立記念祭 (F-1, 2, 3 (DL))、社交的楽しみ (I-1, 2 (DL))、セレナード (J-1 (DL, RSS)) が挙げられる。「ドライシヒ・ジングアカデミー」の会員の追悼コンサートや「リーダーターフェル」と「シューマン・ジングアカデミー」の会員に贈るセレナードのように、仲間の死を悼むための、あるいは仲間に敬意や祝福を表わす演奏行為は、合唱協会の活動において会員同士の密接な人間関係が形成されていたことを示している。また、所属する合唱協会の「創立記念祭」の祝賀の雰囲気共有することは、会員の仲間意識を強め、合唱協会内の結びつきを強化する催しであったと言える。さらに、ドレーズデン近郊への小旅行や夕食会やパーティーなど、内輪で行なわれる19世紀的なさまざまな社交の機会を通して集団内強化が図られた。

第二に、地域内の結びつきは、市内の二つあるいは幾つかの合唱協会の友好関係、協力関係から始まった。「贖罪の日のコンサート」(C-1)における混声合唱協会間の演奏協力関係 (DSとRSS) や、慈善コンサート (E-3) での男声合唱協会と混声合唱協会の共同演奏 (DLとRSS) はその一例である。また、「兄弟合唱協会」と呼び合う「リーダーターフェル」と「オルフォイス」の関係のように、男声合唱協会間の結びつきは互いの創立記念祭への招待 (F-2) や合唱祭の共同開催 (H) によって維持された。前述のように、1842年と43年には、これら二協会の主催によりドレーズデン市内と周辺地域の男声合唱祭が開かれ、男声合唱協会の地域レベルのネットワークが形成された。

第三に、男声合唱協会の地域内の結びつきは、合唱協会連合や合唱祭 (H) を通じて、地域を越える結びつきへと発展していった。1860年代には、こうした結びつきは地域レベルから国家レベルに発展し、全ドイツ的連合組織が形成された。ドレーズデンで「第1回全ドイツ合唱団連合祭」(1865年) が開催されたのは先述のとおりである。

第四に、こうした男声合唱協会の結びつきの拡大は、この時代の愛国的民族主義の高まりと並行している。1865年の「全ドイツ合唱団連合祭」は、長い間国家としてまとまらなかったドイツが統一することに対する市民の熱烈的願望の表れと捉えることができる。また、戦時下の慈善コンサート (E-3) や愛国的祝祭 (G-2 (DL))、ドイツ人芸術家の「記念碑」をめぐる演奏行為 (E-2, G-1) も愛国的精神の表れと考えられる。

3-2. 市民層の社会階層的特徴の表現

また、合唱協会の演奏活動は、会員にとっての市民的地位や立場、および市民的な生活様式や行動様式の表現と解釈することもできる。

第一に、いくつかの演奏機会は、19世紀の「市民的社交」として捉えることができる。創立記念祭の祝宴や舞踏会（F-2）は貴族社会の社交様式を模倣することによって、また、蒸気船や汽車を使った小旅行（I-1）は、当時の最新の交通手段を取り込むことによって生まれた「新しい市民的社交形式」であり、当時、都市の市民層の間で流行したものであった。会員たちは、こうした「新しい社交」を経験することにより、「市民らしい」行動様式を身につけていることを自覚し、またそれを社会に対してアピールすることになった。従って、合唱協会の活動は、会員にとって「市民的地位」を表現する手段になっていたと言える。

第二に、市民的地位をめぐる表現行動は、このような内輪の活動だけでなく、公の場においても発揮された。宮廷楽団の「枝の主日のコンサート」（B）や記念碑の除幕式（G-1（DL））、ザクセン王家の祝賀行事への参加（G-3）は、会員にとって、ドレーズデンの社会的、文化的エリートとしての立場や代表性を表明する行為になっていたと考えられる。

第三に、こうした市民層のエリート意識は、君主や貴族との結びつきによって強められた。「ドライシヒ・ジングアカデミー」ではとりわけこの傾向が強く、合唱コンサート（A）や創立記念祭（F-1, 2）への国王一族の臨席、王族のための追悼コンサート（D-3）によって表現された。また、「リーダーターフェル」や「シューマン・ジングアカデミー」も、ザクセン国王の記念碑建設のコンサート（E-2）や王家の慶事の祝いへの参加（G-3）を通して、君主への敬意や忠誠を示す行動をとっている。

しかし、第四に、市民層の立場や地位の表明は、こうした上流階級との結びつきによって示されるだけでなく、下層との間に距離を置く態度によっても示された。慈善コンサート（E-1）による貧困層への援助など社会の下層に向けられたまなざしは、見方を変えれば、市民層とそうでない人々の間に線引きをすることによって生じているとも考えられる。

第五に、文化的指導層としての役割も、市民層の社会階層的特徴の表現の一つに挙げられる。宮廷音楽の勢力が強く、19世紀後半まで市民的な演奏会制度が確立しなかったドレーズデンでは、合唱協会のコンサート（A）が市民に音楽演奏を提供する重要な役目を果たしていた。また、三つの合唱協会は、合唱コンサートを始め、枝の主日のコンサート（B）、贖罪の日のコンサート（C-1）、追悼コンサート（D）という公開（半公開）演奏の場において、他都市で既に評価されていた過去や同時代の合唱音楽をドレーズデンに紹介するという役割も担っていたのである。

4. 結び

本稿は、合唱協会という音楽活動を対象とし、その演奏機会に注目することによって、そこに表れる市民のさまざまな表現行動を分析してきた。その分析結果をまとめると次のようになる。

ひとつには、合唱協会の会員は、さまざまな演奏機会を通じて、合唱協会という集団内の結合のみならず、市内や地域内、さらには地域を超えた広範な市民のつながりを経験することができたということが明らかになった。男声合唱協会による全ドイツの規模の合唱祭ならびに普仏戦争下の愛国的な慈善コンサートに見られる民族主義的表現や政治的機能は、こうした「市民の結びつき」の一面を表わしていると言える。

また、合唱協会の行なった演奏機会には、市民層の社会階層的特徴が表現されていることも明らかになった。会員は、合唱練習のための集会や創立記念祭、小旅行という「市民的社交」に参加することによって「市民的地位」を自己認識し、他者からもそれを認証されたと考えられる。こうした「市民的地位」をめぐる表現は、これらの日常的な活動レベルでの「私的な」演奏機会においてだけでなく、宮廷楽団との共演やザクセン王家の慶事への参加といった「公的な」演奏機会においても確認された。また、「公的な」演奏機会への参加は、会員の社会的エリートとしての意識につながっていると同時に、市民的音楽生活において指導的役割を担っているという文化的エリートとしての意識にも結びついていた。

従って、合唱協会が行なった数々の演奏機会は、会員にとって、都市市民層の「横のつながり」と「社会的自己表現」を実現する手段であったと言える。

注

- 1) 本稿は、筆者がお茶の水女子大学に提出した博士論文「19世紀ドレーズデンの合唱協会研究：合唱活動のもつ社会的側面に関する考察」(井上2002)の第4章の一部に修正を加えたものである。
- 2) 19世紀ドイツの都市の音楽活動に関する社会史研究の多くはベルリンやヴィーンなどの政治的中心都市を対象としており、ドレーズデンのような一地方都市はこれまで取り上げられなかった。しかし、市民と音楽活動の問題は、それぞれの都市の社会的・文化的脈絡において捉えるべきものであり、中心都市の例が「規範的」モデルを示すわけではない。ドレーズデンのように、旧身分社会の根強い支配のもと、近代的な市民的音楽生活の発展が遅かった都市において市民の音楽活動を研究することは、「規範」のように扱われてきた中心都市のケースを相対化する意義をもつと考えられる。
- 3) 19世紀ドイツの市民層は、貴族・聖職者と労働者・貧民の間に位置する中間身分を指すが、それは職業、教育、収入、社会的出自において多様であり、法的身分でもないことから、統一した一つのまとまりとして定義することは難しい。本稿では、都市に住み、高等教育を修めてそれを職業に利用し、共通の文化的特徴、生活様式、価値観をもつ社会階層と定義しておく。具体的には、経済・有産市民層(商人、工場主、銀行家、資本所有者、企業家など)と教養市民層(医者・弁護士などの自由業、ギムナジウム・大学教師、裁判官、高級行政官、自然科学者など)、さらに、これらの周辺グループ(手工業親方、教員、小商人、小規模自営業者)もここに含まれる。
- 4) 本研究では、これまでの音楽研究ではなおざりにされてきた19世紀の合唱協会の規約、活動報告書、『記念論集』のような刊行物を一次資料として用いている。これらの資料は、合唱協会の活動の当事者(会員や役員)によって記され、刊行されたものであり、その叙述から協会の組織的特徴、運営方法、会費および財政、構成員の人数や社会的出自、そして演奏活動の記録を把握することができる。
- 5) 当該三協会が指導的役割を担っていた根拠として、以下の4点が挙げられる。1. ザクセン宮廷楽長や市内の主要教会のカントル、著名な作曲家など、ドレーズデンの代表的音楽家が合唱協会の歴代指揮者を務めていた。2. 会員はドレーズデンの上層市民層を中心に構成されていた。また、活動場所が旧市街地という都市中心部に集中していたこと、会員の一部が重複していたことは、三協会間の社会階層的特徴の類似性を示している。3. ドレーズデンにおける予約定期演奏会の確立(1850年代末)に先駆けて、定期的な公開(半公開)演奏会を催し、市民に音楽演奏を提供していた。4. 資料の叙述には、自分たちの合唱協会が「先駆的」「指導的」立場にあることを自負する態度がみられる(DS1907:5, DL1889:126, RSS1898:38-39.)。
- 6) なお、当時のドレーズデンで活動した合唱協会数を正確に把握するのは難しい。1850年からドレーズデン警察当局により協会・結社の管理が開始されたが、その団体登記簿(Polizeipräsidium Dresden III.3.3.7.2.2.Nr.12)には、1854年時点で当該三協会を含む二十三団体が記録されている。またDS1907の叙述から、これらに五団体を追加することができる。従って、19世紀半ばの市民の合唱協会について言えば、筆者は二十八団体を確認している。そのうち会員構成や演奏活動の詳細を知るのに十分な一次資料が揃っているのは当該三協会を含む五団体のみである。
- 7) 考察対象期間が合唱協会によって異なるのは、本研究の目的が、三協会の活動傾向の比較ではなく、ドレーズデンの市民と合唱活動の関係を、19世紀を通して包括的に捉えることにあるからである。DSの設立は19世紀初頭のドレーズデンにおける合唱協会の発生を、DLとRSSの設立は19世紀中葉に市民層の間で合唱協会が普及したことを示しており、三協会の活動が発展する19世紀後半は、ドレーズデンにおいて合唱活動が広範な住民層へと拡大する時期と重なっている。
- 8) なお、これらのデータは、この期間内に行われた全ての演奏機会を含んでいるとは限らない。なぜなら、現在入手できる資料は限られており、また、合唱協会によって何を資料に記録するかという基準が異なっていたからである。
- 9) 「ドライシヒ・ジングアカデミー」の規約には、「合唱曲の修業を通して、あらゆる時代の教会様式、とくにまじめな様式によるしっかりした作品のできるかぎり完璧な演奏を通して、高級なジャンルの音楽に対する感覚を維持し、活気づけることを目的とする」(DS1832)と記され、「シューマン・ジングアカデミー」の規約には、「この協会の目的は、あらゆるジャンルとあらゆる時代のしっかりとした合唱作品の、丹念な練習と演奏を通して、混声合唱を振興することにある」(RSS1886)と記される。ここには演奏されるべき音楽作品の基準や、音楽演奏に重きを置く

態度が示されている。一方、「リーダーターフェル」の規約には、「歌のさらなる教育と社交的楽しみを通して、決められた夕べの集いを、会員にとってためになる、楽しいものとするを目的とする」(DL1841)と記され、合唱練習は社交的楽しみと結びつけられている。

10) 混声合唱協会が、男声合唱協会と同様、創立記念祭や社交的活動を定期的に行った可能性はあるが、積極的に記さなかった点で両者の活動方針は一線を画す(注17参照)。

11) ライプツィヒの「ゲヴァントハウス・コンツェルト」(1781年)やベルリンの「ベルリン・ジングアカデミー」(1791年)のように18世紀後半に定期演奏会が確立していた都市と比べて、ドレーズデンでは市民的演奏会の制度化は遅く、ようやく1858年に宮廷楽団によって予約定期演奏会が導入された。

12) 1833年の「枝の主日のコンサート」では、J.S.バッハの《マタイ受難曲》の復活演奏が行われた。ベルリンでの最初の復活演奏がメンデルスゾーンと「ベルリン・ジングアカデミー」という市民的協会の主導により実現したのと異なり、当時宮廷音楽界の勢力が強かったドレーズデンでは宮廷楽団主催のコンサートにより実現された。ただし、合唱には「ドライシヒ・ジングアカデミー」のような市民的協会の協力を得ていた。

13) 三つの合唱協会は、ドレーズデンにおいて知的・芸術的職業あるいは商工業・金融業に就く上層市民層を中心に構成されたが、より詳しく見ると、19世紀初頭に設立された「ドライシヒ・ジングアカデミー」は君主とのつながりが強く、貴族身分の大臣や高級官僚が会員に含まれていた。また、19世紀中葉に設立された「シューマン・ジングアカデミー」では19世紀を通して10%前後の高級官僚の参加が見られたが、「リーダーターフェル」には貴族も高級官僚もほとんど加盟していなかった。なお、構成員の社会階層的特徴に関しては、井上2002の第2章(46-76頁)で詳しく扱っている。

14) 《ラインの護り》、《ドイツ軍の軍歌》、《ゲルマニア》、《勝利の知らせ》、《誠実なドイツの心》などが歌われた。なかでも、カール・ヴィルヘルム(C. Wilhelm)作曲の《ラインの護り》は「愛する祖国よ！ラインの護りが堅固ならば、そは平穩ならん！」というリフレインをもち、当時絶大な人気を博した(DL1889:64-69)。

15) DL1889は1850年から1889年の間に上演された23の音楽劇について記録している。

16) 国内からはバイエルン(75団体)、ハノーファー(22)、ヘッセン(14)、リューベック(16)、オーストリア(124)、プロイセン(302)、ザクセン(353)、チューリンゲン(36)、ヴェルテンベルク(17)、ドイツ以外ではイギリス、ヘルゴランド諸島、ロシア、ポーランド、リヨン、パリ、ペテルスブルク、フィラデルフィア、ピッツバーグ、インディアナポリスが参加した(DL1889:45)。

17) 「ドライシヒ・ジングアカデミー」の資料(DS1907)と「シューマン・ジングアカデミー」の資料(RSS1898)にも夏の遠足やハイキングについての断片的な記録はある。

18) セレナードという語は、18世紀半ばに発展した多楽章の器楽様式や、18世紀の王侯貴族の祝賀のための小規模のオペラ的作品(この場合はセレナータと呼ばれる)、そして恋人または敬意や祝いを表わすべき人の家の前で贈り物として演奏される小曲(シュテントヒェンStändchen)などを指す、多義的な語である。本論では、最後のシュテントヒェンに近い意味あいを使っている。

19) 合唱協会と市民のつながりに関しては、「リーダーターフェル」を事例としたウンフェルハーウの研究がある(Unverhau2000)。彼はシュレスヴィヒ・ホルシュタインを例に上げ、1840年から1848年の間に行われた合唱祭、民衆祭、祝宴という活動が、当地の民族的・政治的意識の発生と発展にどのように関わっていたかを検証している。

20) 19世紀の合唱協会は、市民にとって、定期的に(週1、2回)決まった場所に集まって合唱の練習をするという有意義な文化的活動であり、市民的社交のひとつに数えることができる。また、こうした定期的な合唱練習や演奏会に加えて、合唱協会は、創立記念祭の祝宴や舞踏会、都市近郊へのハイキング、仲間や国王に捧げるセレナードなどの社交的活動も繰り広げていた。つまり、合唱協会に加盟する市民は、合唱活動を通じて、当時流行していたさまざまな「新しい社交形式」を体験することができたのである。

参考文献表

- DL1841=*Statuten der Dresdner Liedertafel. 1841.* (出版者/社不明)
- DL1889 =*Festschrift zur Feier des fünfzigjährigen Bestehens der Dresdner Liedertafel. 1889.*
HARTWIG, Richard (Hg.). Dresden: Verlag der Hofmusikalienhandlung von G. Näumann.
- DS1832=*Statuten der Dreyssig'schen Singakademie zu Dresden, entworfen und angenommen im Jahre 1832.* (出版者/社不明)
- DS1907=*Geschichte der Dreyssigschen Singakademie zu Dresdsen. Zur 100 jährigen Jubelfeier.*
Dreyssigsche Singakademie (Hg.). Dresden: Hofmusikalienhandlung von F. Ries.
- RSS1886 (1864) =*Statuten der Robert Schumann'schen Singakademie. Revidierte Fassung der Statuten vom 12. Mai 1864.*
Dresden: Druck von Hellmuth Henkler.
- RSS1898 =*Robert Schumann'sche Singakademie zu Dresden. Festschrift zur Feier des 50 jährigen Jubelfestes am 5. Januar 1898.*
BÜTTNER, Max (Hg.). Dresden: C. Heinrich.
- Polizeipräsidium Dresden III 3.3.7.2.2.Nr.12. (Sächsische Hauptstaatsarchiv Dresden)
- DAHLHAUS, Carl, 1980, *Die Musik des 19. Jahrhunderts. Neues Handbuch der Musikwissenschaft.* Bd.6. Wiesbaden: Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion.
- 井上登喜子, 1998, 「R.シューマンと「合唱協会」の活動」, 『音楽学』第44巻1号:16-29. 2002, 「19世紀ドレーズデンの合唱協会研究: 合唱活動のもつ社会的側面に関する考察」(お茶の水女子大学博士論文).
- KASCHUBA, Wolfgang, 1988, "Deutsche Bürgerlichkeit nach 1800. Kultur als symbolische Praxis", in KOCKA, Jürgen (Hg.)
Bürgertum im 19. Jahrhundert: Deutschland im europäischen Vergleich. 3 Bde. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. [1995 (縮小版)
Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.]
- MAHLING, Christoph-Hellmut, 1966, "Zur Soziologie des Chorwesens", in MAHLING, Christoph-Hellmut (Hg.) *Zum 70. Geburtstag von Joseph Müller-Blattau.* Kassel: Bärenreiter: 192-200.
- SOBANIA, Michael, 1996, "Vereinsleben. Regeln und Formen bürgerlicher Assoziationen im 19. Jahrhundert", in HEIN, Dieter; SCHULZ, Andreas (Hg.) *Bürgerkultur im 19. Jahrhundert. Bildung, Kunst und Lebenswelt.* München: C. H. Beck: 170-190.
- UNVERHAU, Hennig, 2000, *Gesang, Feste und Politik. Deutsche Liedertafeln, Sängerkulte, Volksfeste und Festmäler und ihre Bedeutung für das Entstehen eines nationalen und politischen Bewußtseins in Schleswig-Holstein 1840-1848.* Frankfurt/M: Peter Lang.

The Social Self-Expression of the Upper Middle Class through Choral Activities

-In the Case of the Choral Societies in Nineteenth Century Dresden-

INOUE Tokiko

The purpose of this paper is to examine choral societies founded in Dresden during the first half of the nineteenth century and to reveal the social aspects of the bourgeois choral activities. Only a few studies on the choral society itself have been conducted and little attention has been given to the functions of their amateur musical activities. As a result, three notable and representative examples were chosen for analysis in this paper: two mixed choral societies *Dreysing'sche Singakademie* and *Robert Schumannsches Singakademie*, and a men's choral society *Dresden Liedertafel*.

The material in this paper is derived from mainly published documents on these three societies, such as articles of associations and commemorative publications. By analyzing details such as performance opportunities and repertoire, how social status or cultural attitudes were reflected in the variety of choral activities of the upper middle class is investigated.

The results indicate that the activities encouraged members' cooperative spirit within their own and other fellow choral societies. Such cooperation was connected with the patriotic regional and national union. The results also discover that the activities were an expression and display of the members' social status. It is concluded that these attitudes were a self-expression of their social and cultural elitism.

Key words : Choral Society, Choral Activity, Concert, The Middle Class, Repertoire, Social Status